傍丘部事務所改築工事に伴う立会調査

畝傍陵墓監区傍丘部事務所は奈良県香芝市今泉の武烈天皇傍丘磐坏丘北陵陵前に所在する。同陵は、西名阪自動車道香芝ICの南側、JR和歌山線志都美駅からはおよそ500ｍ西側にあり、明神山の南に連なる山塊から北東へ延びる丘陵を利用した山形の陵墓で、前面にはコの字形の濠を備えている(第16図)。

本調査は、一般拝所横にあった部事務所が経年により老朽化し、改築されることになったために行ったものである。今回の改築を契機として、事務所の機能強化が図られるとともに車庫・倉庫が併設されることになったため、床面積は５倍近くになり、位置も駐車場の一角へと変更された(第17図)。

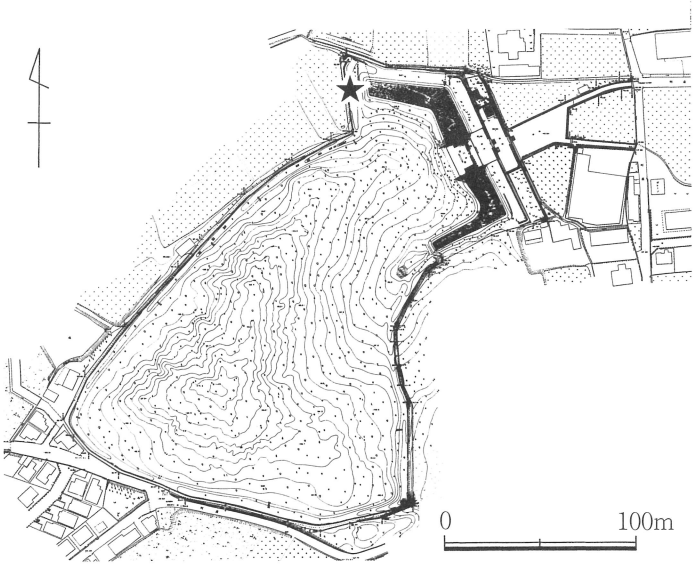
工期は平成19年10月30日～平成20年３月17日で、うち平成19年11月13日に本部職員による立会調査を実施した。本部立会調査時には予定地の地盤改良が検討され始めた段階であったため、改築箇所敷地の２箇所についてより深い工法を採用した場合の深度である現地表面下２ｍまで先行的に掘削し、土層の状況を確認した。その後、11月末から12月下旬まで断続的に行われた本体基礎部分や付帯工事の掘削に際しては現地監区職員による立会調査を実施した。

今回の掘削で観察し得た土層は大きく３層に分かたれた(第18図)。Ⅰ層は現在の駐車場および参道の造成土、Ⅱ層は駐車場造成以前の堆積土層、Ⅲ層は地山層である。第１トレンチでは現地表面下0.4ｍまで、第２トレンチでは地表面下0.7ｍまでがⅠ・Ⅱ層である。Ⅱ層の様相は両トレンチで異なっており、第１トレンチでは厚さ10cm～30cm程度の暗青灰色や暗褐色を呈する締まりのない粘質土層が何層も重なっていたのに対し、第２トレンチでは厚さ30cm程度の暗青灰色粘質土層があり、さらに下方に厚さ50cm程度の茶褐色粘質土層が堆積していた。この茶褐色土層内から瓦器椀片が出土している。参道部分では現地表面下0.4ｍまではⅠ層と思われ、0.4ｍ以下は青灰色を呈する締まりのある粘質土層でⅢ層と思われる。

今回の掘削場所からの出土遺物は８点で、時期が遡りそうなものは、上記の瓦器椀片、排土中から採集した土師器皿片、瓦質土器片、陶器片があるが、そのうち瓦器椀片、土師器皿片を図化した(第19図１・２)。１は瓦器椀片で、内面および外面上半部に横方向のミガキが顕著に見られる。２は土師器皿片で、口縁端部がナデによってつまみ上げられている。内面に煤の付着が見られることから灯明皿に用いられたものと思われる。

土層や出土品の状況から、駐車場の敷地は、本来低かった南西側が中世以降に埋没して耕作地となり、明治22年(1889)の陵治定後に整備を重ねて現状となったものといえよう。

以上、本工事における掘削箇所においては保存すべき遺構は認められず、工事は地盤改良の追加を除けば予定通りに行われた。



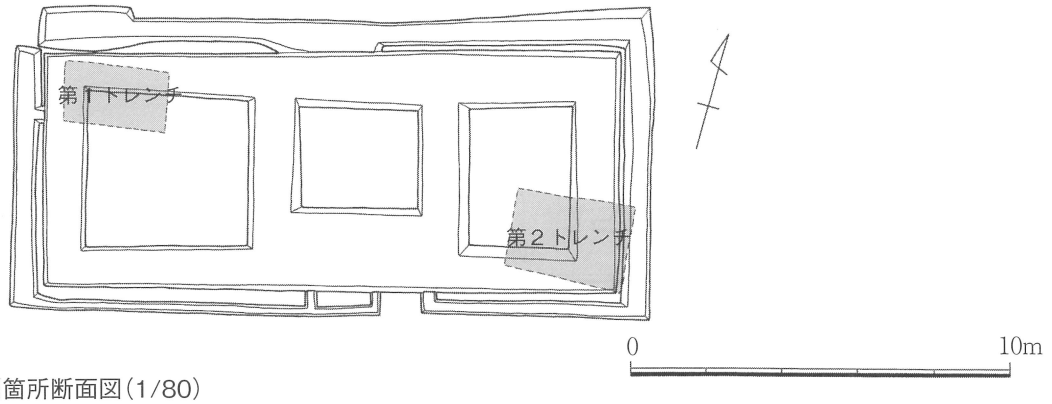
第16図　傍丘磐杯丘北陵　地形図（1/4000）

また、調査期間中に墳塁北側の巡回路上(第16図★印)で須恵器片を採集したので紹介しておく(第19図３～７)。

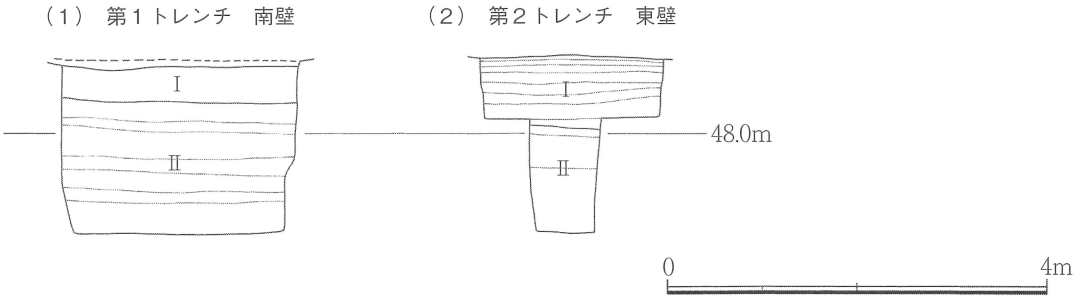
３は低平な蓋で、宝珠形のつまみがつくものと思われる。４は壺あるいは甕の口縁部片で、内面に重ね焼きの痕跡が見られる。５は杯身で受け部の立ち上がりは薄く端部に内傾した面取りがある。６は底部で、高台状に削り出されている。７は器種不明の脚部。長方形の透かしが２段認められる。同一箇所からはほかに甕の胴部と思われる破片なども採集している。

第 17 図　傍丘部事務所　掘削箇所位置図（1/1000）

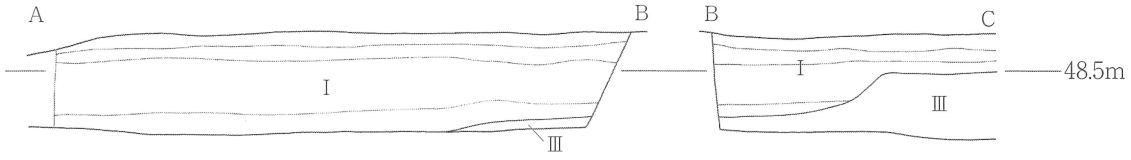
1　事務所基礎掘削箇所平面図(1/200)



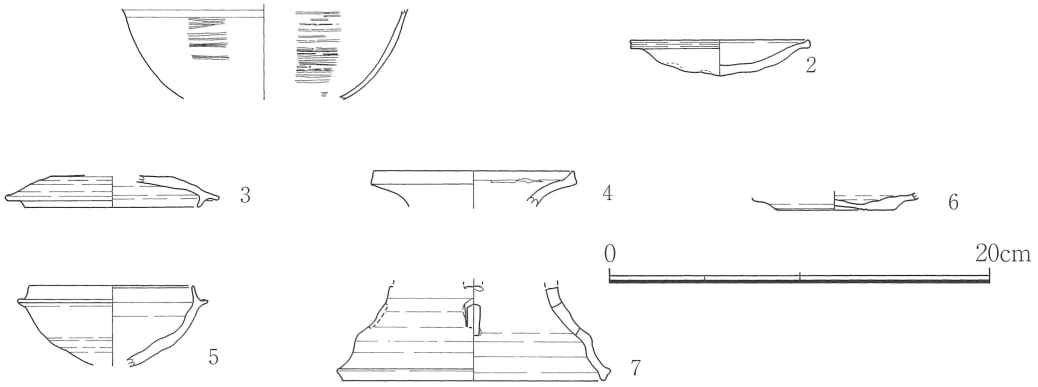
2　掘削箇所断面図(1/80)



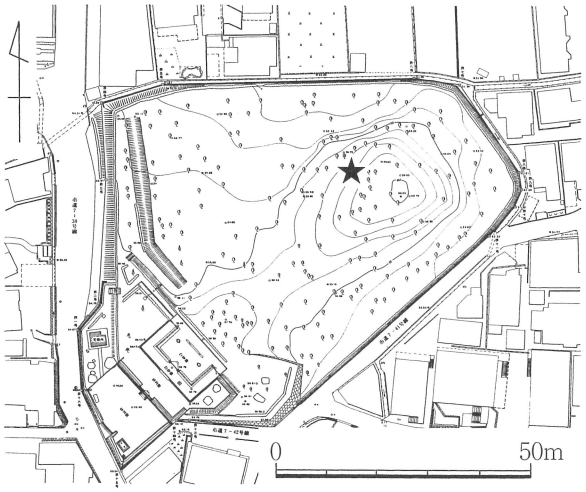
3　下水道管埋設箇所



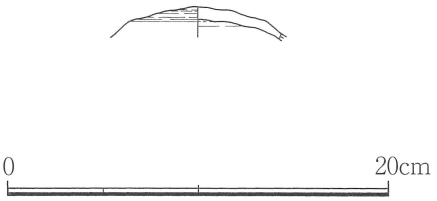
第 18 図　傍丘部事務所　平面図（1/200）・断面図（1/80）



第 19 図　傍丘部事務所　出土品実測図（1/4）



第 20 図　傍丘磐杯丘南陵　地形図（1/1500）



第 21 図　傍丘磐杯丘南陵　出土品実測図（1/4）

採集地点は濠北側の西端で墳塋にとりつく巡回路で、西側の水田面からも高く盛り上がっており、渡土堤状を呈している。遺物はその上面から西側斜面にかけての狭い範囲に半ば埋もれながら散乱していた。遺物の内容に時期幅が認められることや出土状況などから、この場所に何らかの遺構が存在しているものとは考え難い。巡回路の盛土に使用されている土に遺物が含まれていたか、あるいは何者かが採集した遺物を投棄した可能性も考えられる。

なお、当陵から南方 1.2㎞に所在する顕宗天皇傍丘磐坏丘南陵の墳丘北側斜面（第 20 図★印）においても遺物を採集した。小片ではあるが顕宗天皇陵からの出土遺物としては初めてのものと思われるので紹介しておく（第 21 図）。須恵器の蓋で、外面には時計回りの回転ケズリが認められる。かつて石室を掘り出し破壊したという(1)当陵に伴うものである可能性がある。　（有馬　伸）

註

（1）　谷森善臣『山陵考』、慶応 3 年（1867）。有馬祐政編『勤王文庫』第三編　山陵記集、大日本明道会、1921 年、所収。